

筆道資料の探訪

平安時代



桓武天皇が延暦十三年（七九四）平安京に都を遷して後、約四百年間は貴族を中心とした社会でした。彼らの生活はひたすら美を求め、優雅な趣味にあけくれまされた。書の上にもそれは現われて、筆蹟には品があり「艶」と「雅」の時代思潮や宮廷生活の様相がよくうかがわれます。そしてこの時代の大きな特色として仮名文字が出現したことがあります。

「筆の改良によって獨創性豊かな書風も生まれてくる。九世紀前半ごろ嵯峨天皇、弘法大師、橘逸勢等数多くの能書家が輩出した。十世紀から十一世紀にかけては小野道風、藤原佐理、藤原行成（三人を後に三蹟と称した）らが世に出て、いわゆる和様の書風を生み出した。中でも藤原行成の子孫は、世尊寺流書道の家として以後中世を通じてその地位を保持した。「性靈集」によると、空海に

嵯峨朝の皇太子大伴親王のためにも改良筆を献上しており、その製筆技術を担当したのは仮名清川でなく槻本小泉であった。空海によって改良された製筆法を伝授されたのは一人だけでなく複数いたことが知られる」
（熊野町史通史編六八九頁）

平安時代末期とりわけ著名なものは、平家納経の名で知られる経卷群でしょう。

平家納経は法華経のほか、清盛自筆の願文一卷を添えてすべて三十三巻より成っており、巖島宝庫仏書目録に次のような記録があります。

- 法華経 平家一族之自筆
- 観普賢経 平清盛一族自筆
- 無量義経 平清盛一族自筆
- 阿弥陀経 平清盛筆
- 心経 平清盛筆
- 法華経 平清盛、頼盛両筆



明治五年 巖島神社宝物目録三卷